

備え まずはハザードマップ

★★★★

サイン

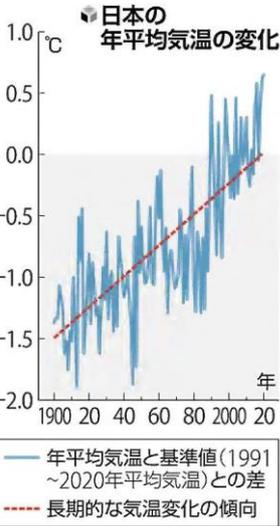
年 組 () 名前

九州豪雨で氾濫した球磨川。流域の住宅街では甚大な被害が出た。(2020年7月4日、熊本県人吉市で、本社機から)



温暖化 災害級の雨急増

地球温暖化の進行に伴い、国内で災害を引き起こす大雨が増えている。気象庁によると、「1976～85年」と「2011～20年」の各10年間を比べると、1時間に50ミリ以上の「非常に激しい雨」の発生回数は約1.5倍に、同80ミリ以上の「猛烈な雨」は約



1.9倍に増えたという。豪雨災害のリスクは、今後さらに高まる恐れもある。産業革命前(18世紀)からの世界平均気温の上昇幅が4度になった場合、21世紀末には「非常に激しい雨」が20世紀末の約2.3倍に増えると予測されている。

備え まずはハザードマップ

近年の日本では、豪雨災害のリスクを抱える地域の人口が増え続けている。国土交通省の推計によると、河川氾濫で被災する恐れがある「洪水浸水想定区域」の住民は、1995～2015年の間に169万人増え、日本の総人口の28.7%(3651万人)を占めるに至った。この区域の人口割合は今後も増え、50年には総人口の30.5%に達するとの報告もある。

ハザードマップのチェックポイント

- 自宅や周辺地域の浸水危険度
- 避難が可能な複数の経路
- 安全な避難先や移動手段
- 浸水の継続時間や、堤防決壊時に住宅が倒壊・流出する地域

水害への備えとしては、住民自身が自宅のリスクを知ることが第一歩となる。そこで役立つのが、市町村が公表する洪水ハザードマップ(災害予測地図)だ。避難に役立てるには、自宅や周辺地域、避難先がどの程度浸水するかを確認することがポイントになる。浸水域に含まれない場所も安全とはいえない。川の水位が上昇して橋が使えない、「崖崩れで道路が通行止め」などのケースを想像

し、複数の避難経路を用意しておくといい。知人宅やホテルへの移動、在宅避難が選択肢に入る人もいる。片田敏孝・東京大特任教授(災害社会学)は「ハザードマップは、避難のタイミングや避難先を考える際に参考になる。その上で最も重要なのは『己を知る』ことだ。自然災害に立ち向かうには、もし我が家が被災したら、という積極的な姿勢で学ぶ意識を持つことが大切」と訴える。



(2021年6月20日 読売新聞朝刊より)

【1】洪水で自宅が浸水する被害が想定される

のは、国民の何%ですか。

【2】地球の温暖化が進

み、日本には様々な変化が起きています。記事とグラフから読み取れる変化を説明しましょう。

【発展問題】豪雨による被害は、洪水だけではありません。地域のハザードマップを見て自宅周辺の危険を調べ、避難する時にどうすればよいかを考えて、裏に書きましょう。

